

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

最終回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第7章 晩年の清隆（続き）

榎本武揚との生涯の友情

— 黒田家との血の結合へ（続き）

この辺で、清隆のライバル山県有朋の家庭状況について、もう少しふれる。

山県も清隆と非常に似た生い立ちであり、前述したように彼も早くに実母を失い、そのぬくもりを知らなかった。

継母は悪女といわれ、山県は祖母にすがって成長したが、その祖母も、彼が25歳のとき、入水して死んだ。

その後、自分の先々のことを考え、姉の子伊三郎（6歳）を養子としてもらい受けた。

30歳のとき、下関の資産家の娘で下関小町の評判のあった友子と結婚した。友子はこのとき15歳であった。

友子は3男4女を生んだが、ことごとく夭折して、残ったのは次女松子一人であった。

友子が病床についたころ、山県は新橋の芸者貞子を妾に持った。その後、友子は41歳で他界している。

山県が、頑固で冷徹な性格であったのは、こうした家庭的な不幸によるものであろう。

清隆も3男4女であったが、結局、成人したのは身体の弱い清仲と、梅子だけであった。

話が前後するが、明治23、4年（1890、91）ごろ、清隆は札幌・薄野の芸妓「黒清」（明治5年生まれ。）

に出会った。

この時期は、清隆が内閣総理大臣を辞任し、枢密顧問官の閑職にあったところで、黒清は18歳前後であった。

彼女に関する資料は少ないが、薄野の芸妓を紹介したものなどにわずかながら残っており、本名を小林キヨ（明治5年生まれ）といった。

豊川稲荷堂が建立されたとき、数えて27歳で、人望が厚く、のちに新見番の取締の要職についていたという。

一説によると、彼女は右足が悪かったらしい。

清隆は来道するたびにそんな黒清をいとおしみ、「黒清」の芸名を与えて、

「きよ、きよ」

とって^{ひいき}鼻真にした。来道した高官には、何をさておいても彼女を紹介した。

黒清もまた、そんな清隆に惚れぬいたという。

清隆の死

清隆も、明治10年に木戸孝允、西郷隆盛が死亡し、翌11年に大久保利通が暗殺されてからは、内務卿を継いだ伊藤博文の政治力に押されて後退していった。

そのうえ、晩年は脳溢血、坐骨神経痛などに苦しめられた。榎本家に嫁いだ梅子も戻ってきて、看病をしていた。

彼が永遠の眠りについたのは、枢密院議長の現職にあった明治33年（1900）8月23日であった。享年59。

清隆は、その10日ほど前から坐骨神経痛が悪化し、不眠の状態が続いていた。

当日は、

「気分がよい。今夜はよく眠れるだろう」

と梅子にうれしげに話しながら、静かに横になった。そのまま西郷や大久保のもとへ旅立っていったのである。

清隆の死が公表された25日、政界では伊藤博文が立憲政友



伊藤博文（国立国会図書館蔵）

会の綱領などを発表し、あわただしい中であつたが、清隆邸には、別れを告げる人々の出入りが相次いだ。

清隆の遺書には、

「国家多事るとき、葬儀は質素をむねとし、土葬は墓地がひろくなり好ましくないから、火葬にして、ひとつの壺つぼにおさめるだけでよい」

とあつた。

すでに生前、札幌穴の沢産の石を取り寄せて、簡素な墓が造営されていた。

葬儀委員長をつとめたのは、清隆の盟友榎本武揚だつた。明治天皇が清隆に与えた別れの言葉は、「嘗て帷幕いぼくに参じて征討の勲を奏し、夙つとに辺櫃へんきょうを埋めて開拓の基を定め、枢要に歴任して世の重望を負う」

というものだつた。

元札幌農学校生の内村鑑三も、熱烈な弔詞をささげている。

芸妓黒清は、清隆の死が公表された8月25日、札幌の見番の稽古部屋で若い芸妓に芸ごとを教えていて、突然の訃報を聞いた。

彼女は持っていた三味線を落として絶句したという。

清隆の養女百子は生来、勝気で行動的な性格で、清隆の生前は、彼の私設秘書的な役割を果たしたりして尽くした。また百子と夫の黒木ためもと為楨との間に生まれた子、黒木清が黒田家を継いでいる。

百子は昭和36年に93歳で大往生を遂げるまで、黒田家の存続に人一倍心を砕いた。百子の生前に直接会った故井黒弥太郎氏の記録によると、彼女は思い出を語る言葉のはしばしに、何ら曇りなく



黒木為楨（国立国会図書館蔵）

養父清隆を敬愛し切っていることが感じられ、到底、病弱の姉、清を殺した男とは思えなかったという。

生前の清隆と、生涯盟友関係にあつたのは、榎本武揚である。清隆と後妻滝子との間に生まれた長女梅子が、榎本の

長男武憲と結婚したことは、前述した。

その後も、榎本家の武憲・梅子夫婦の子の千代子が、先に黒木家から黒田家に入っていた清の養子という形で入り、酒匂常清（慶応大学出身、実業界）と結婚して、黒田家をさらに継承している。

清隆の姉のたかは、井上貞教という人と結婚しているが、その子はる子が酒匂常清の父、常明（農学者、農に商務省農務局長）に嫁いでいる。

世の無常を感じるのは、清隆の後妻滝子本人のその後で、伯爵の夫人であつた滝子は、明治37年（1904）正式に黒田家の籍から除かれ、一人寂しく施料病院でなくなったと伝えられている。実家の丸山家の倒産も何らか関連していると思われる。清隆・滝子夫妻のもうひとりの子清仲は病弱で、独身のまま、32歳で逝去した。

清隆は薩摩閥の代表格と見られてきたが、西南戦争後、ついに故郷鹿児島鹿児島の土を踏むことはなかったという。

清隆の盟友であり、のちには“親戚”ともなつた榎本武揚は、清隆に遅れること8年、明治41年（1908）10月26日に永眠した。享年71。

清隆のライバル山県有朋は、大正12年（1923）まで生きて、85歳で逝去した。

生前の彼は、長く軍の重鎮として存在しながらも、清隆と同様に内閣総理大臣という行政の頂点をきわめた。

もちろんこれには、両人がそれぞれ薩摩閥、長州閥の頭領と目されていたことも、大きくかかわつたに違いない。

しかしそれ以上に2人が、

「貧しい生まれ」

という、逆境をバネにしてたくましく生きた側面を無視できないだろう。

その意味では、生涯反目し合つて生きた2人も、案外根本のところでは共通したものがあつたのではなかろうか。

山県の家を継いだのは、養子の伊三郎であつた。ただ一人残つた次女の松子は、外交官に嫁いでいる。

山県は、かつて清隆と長岡城攻略を競つていたころ、近代兵器導入などの必要性を痛感し、西郷隆盛西郷隆盛に対して、

「他日、ぜひ外遊の機会を得たい」

と懇願した。

西郷は、のちにその願いを実現してやった。このことが、陸軍指導者としての確固たる基盤を築く契機になった。

ただ、例えば長岡城の陥落後、清隆の向かった庄内は帰順し、平和裡に解決し得たのに対し、山県の向かった会津の戦争が凄惨をきわめたようなことがあったのは、何とも皮肉なことであった。

清隆は西郷に従い、若くして多くの戦功をあげたが、その後は、山県のように軍部ですっと活躍し続ける、という立場にはなり得なかった。

しかし、政界や北海道開拓行政その他の行政全般で広く名を残し得たことは、かえって幸せだったともいえるのではないだろうか。

生前の清隆についての逸話など

武人清隆には、そのほかにも、次のような人柄を彷彿とさせる逸話が残っている。

清隆の盟友榎本武揚は、何と養鶏を趣味にしていた。辰の口の獄に入牢中や後年のロシア滞在中も養鶏を研究し、人にも勧めていた。のちに日本家禽協会会長になったほどである。

清隆もすっかり武揚に感化され、他人を訪問するときも自家産の卵を持参していくことが多く、後年、外務大臣の大隈重信がテロに襲われて入院した際も、見舞いに持参したし、あるときは明治天皇にも献上したことがあった。

その一個ずつに生んだ日付が書き入れてあったので、皆感じ入って、「養鶏伯」と呼ばれたこともあった。

また、清隆には刀剣の趣味があり、彼がまだ若いころ、同僚と連れ

立って下城の途中、石垣のそばで自分の刀を抜くと、それを石の間に挟んで、ぐっとたわめて放した。

刀は音をたてて振動した。

「これぐらい弾力があればよか。おぬしのはどうじゃ」

と、一人の腰の刀

に手を延ばした。

その同僚らは、刀を折られては大変と、すぐ逃げ出したという。

「斬りはせなんだが、すぐ抜いた」

と伝える古老もあった。

清隆の刀剣への関心は、武士のたしなみの域を超えて、刀匠のそれであった。

腕力も強く、相撲取りと腕相撲をして喜んでいたこともあった。

廢刀令以後は、常時ピストルを腰につけていた。札幌農学校生の内村鑑三が、野道で馬上の開拓長官清隆とすれ違った際に、突然ピストルが火をふき、樹上の鳥が落下したこともあった。

彼は、刺客を待つようにピストル操作を繰り返して修練していたが、襲われた形跡は、ただの一度もなかったという。

おわりに

清隆は、ライバルの山県有朋と同様、貧しい家庭に生まれ、それをバネにして、明治維新の激動期をたくましく生き抜いた。

彼は最後は内閣総理大臣まで勤めたし、北海道開拓使の次官、長官として開拓史の上などで語られることが多い。

しかし、実は清隆には二面性があり、そうした政治家ないし行政官の一面のほかに、武人（軍人）としての一面があったのだ。

とくに本稿で描いた明治10年（1877）の西南戦争のころまでは、武人（軍人）としての活躍の方が、光っていたように思う。

生前の清隆の評価は総じて高いとはいえず、一言でいえば、

「毀譽褒貶あい半ばする人物」

と見られていた、といっても過言ではない。

こうした見方に大きく影響したのは、剛毅でやや一本気な性格や、ほぼ一貫して薩摩閥の頭領（西郷隆盛、大久保利通なきあとの領袖）であったこと、夫人の変死事件があり、殺したという風説が流れたこと、酒豪でとかく酒ぐせが悪いとのうわさがあったこと、開拓使の廢止前後に開拓使官有物払い下げ事件を引き起こしたことなどの事情だと思われる。



大通公園に立つ黒田清隆の像

こうした見方が大きく影響してか、清隆について書かれているものは、割合少ない。

ましてや、武人（軍人）としての一面を書いたものは、非常に少ないように思う。

しかし、若き日の清隆には、いわゆる勤皇の志士として、坂本龍馬とともに薩長連合の成立に大きくかかわった（もっとも、このことを知る人は、ごく稀であろう）のをはじめ、ひたむきな努力家、武人（軍人）・軍略家としての顔があった。

清隆は、蛤御門の変や薩英戦争、長岡藩・庄内藩との攻防、宮古湾海戦、箱館戦争、西南戦争などでも活躍し、とくに奇襲攻撃、背面攻撃を得意とする戦略家であった。

この点、同じ武人（軍人）でも、山県有朋の戦法は、もっと慎重で、匍匐前進するようなどころがあるので、かなり違っているように思われる。

清隆は屯田兵制度を創設し、中將となって、みずから山県と並び立った。征韓論、征台論、樺太放棄論でも、独特の力量と存在感を発揮している。

そして、そこには極貧から身を起こした者だけが持つ粘り強さ、頑固さとともに、不思議な寛容さ、柔軟さ、そして情熱を合わせ持っていた。

その59年の生涯をたどってみると、誰しも、やはり清隆という人間の本質は、「武人（軍人）」としての側面にあるのだと気が付くはずである。また、そう考えると、後半生における清隆の行動—もっぱら薩摩閥の頭領、政治家として、山県有朋や伊藤博文らとの政争にあけくれたといっても、過言ではないだろう—の理解し辛い面も見えてくるように思う。

清隆は、山県有朋のように軍部に基盤をおき、一生、武人（軍人）として活躍する立場には、成り得なかった。

彼が兵部省で生き生きと働いていたころ、上司の前原一誠（長州）と意見が対立し、前原が辞表を出す騒ぎがあったが、大久保利通が清隆を説得し、開拓使に回した。このことが、彼の運命を大きく変えたのである。

しかし、そのことは、清隆の人生にとっても、決してマイナスだったとはいいいきれないだろう。もし、武人（軍人）として一生を生きれば、もっと殺伐とした人生になっていたであろうし、ケプロンやクラークと北海道開拓を論じるような場面

も出てこなかったはずだ。

実際、清隆にとって、北海道開拓の仕事は、戦争や政争、そして家庭内のことなどで悩み、疲れ切った清隆の心を癒やしてくれる場でもあったと思われる。

清隆は、箱館戦争後、敵の降将榎本武揚を徹底的にかばい、助命を勝ち取ったことでもわかるように、意気に感じる人情家でもあった。

ただ、師とも仰ぐ西郷隆盛を死に追いやる役回りを演じるはめになり、さらには兄とも慕う大久保を暗殺事件で失った。しかも大久保暗殺には、彼の不徳も絡んでいて、心の傷は大きかった。

清隆は家庭的に恵まれず、子供や妻を亡くし、たえず心の葛藤を抱えて生きて寂しい人でもあった。この点でも、ライバルの山県と非常に似通っていた。

清隆の乾いた家庭の中で、のちに養女となった百子と榎本家の存在だけが、“泉”のように心を癒やしてくれたのではなかっただろうか。

本稿は、明治10年（1877、西南戦争の年）ころまでの清隆の武人（軍人）としての一面に光を当て、その行動と人間性、内面の葛藤などを描くことによって、彼の実像に、より深く迫ろうと試みたものである。

（完）

本連載は今回で終了いたしました。ご愛読まことにありがとうございました。

なお、本連載に加筆修正して、北海道出版企画センターから単行本として発行されています。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。
